

令和元年（2019年）12月26日

れきみん

資料館だより

No. Ⅲ－23

相生市立歴史民俗資料館

～特別展「あいおいの古代窯業」「あいおいの古地図」を終えて～ 〈播州相生焼雲火風炉を常設展示〉

本年度特別展「あいおいの古代窯業」では、相生市域中央部が西日本有数の焼き物の産地であったという古代史のダイナミズムを再確認し、市民の皆様と共有することができました。特別展には多くの研究者や愛好者も来展されましたが、播州相生焼を生み創作を続けてこられた陶芸家の那波鳳翔氏なばほうしょう（紺4T睦住）も観覧され、窯業全般に関わる有益なご教示をいただきました。

那波鳳翔氏は古代窯業に造詣が深く、あいおい産の平安時代須恵器を播州相生焼として甦よみがえらせました。当資料館では、これまでに特徴的な突帯碗とつたいと双耳壺そうじの寄贈を受け、常設展で展示しています。

さらにこのたび、新たに作品「雲火風炉」うんかふるを寄贈していただきました。

雲火焼は京都の雲華焼の流れをくみ、江戸時代後期～明治時代初期に赤穂おおしまこうこくで大嶋黄谷が生み出した独特の焼き物です。無釉ですが、粘土の質と炎・煙によって夕焼け空を連想させる美しい色彩と文様を生み、陶膚は鈍い光沢を放ちます。その後、陶法が途絶えましたが、現在では桃井香子氏ながむねくにひこ・長棟州彦氏赤穂雲火焼や那波鳳翔氏らによって復元されています。

風炉とは、茶道具の一つで夏秋に用いられます。釜をかけて湯を沸かす炉で、風が入るように縁の一方をあけています。雲火作品は性質上壊れやすいとされ、寄贈作品のような大型品（口径約31cm、最大径約37cm、器高約21cm）はきわめて珍しく貴重なものです。

当作品は常設展（2階展示室）で過去の寄贈作品（先にふれた平安型の突帯碗・双耳壺、雲火灰器）とともに展示していますので、ぜひご鑑賞ください。

〈若狭野村絵図－旗本浅野家の若狭野陣屋を考える－〉

本年度特別展「あいおいの古地図」では、各自治会・機関の協力を得て江戸時代の村絵図を多数展示することができました。その中に天保8年（1837）の「若狭野村絵図」（知行播州赤穂郡村絵図13枚の内の1枚）があり、旗本浅野家の陣屋はたもとじんやについて情報を得ることができます。

赤穂藩浅野本家が断絶する以前、今に残る陣屋跡から西北西に100mほど離れた所に小規模な陣屋があったとされています（松本 2017）。絵図には「御下屋敷林」とあり（写真上）、その辺りが旧陣屋跡を示すのではないかと考えられます。



那波鳳翔氏寄贈の播州相生焼雲火風炉



若狭野村絵図（北西部分） たつの市立龍野歴史文化資料館蔵

また、絵図の「御陣屋」には建物が描かれています（写真）。建物の配置や間取りが詳しく描かれた享和元年（1801）の「御陣屋 御役宅絵図面 若狭野陣屋絵図」や天保7年（1836）の「若狭野陣屋絵図面」と比べると簡便・雑駁で正確さを欠きますが、「住居」「役宅」「蔵」「長屋」「門」「郷會所」などの建物の絵と名称が記されています。

「郷會所」は領内の百姓らに対応する事務所とみられ、門の東西ラインの南側に描かれています。「郷會所」は、①享和元年および天保7年の絵図に描かれた南東側建物の南半分を指す、②改変されながらも現在まで残っている「札座」と呼ばれる建物を指す、などの可能性が考えられます*。いずれにしても、当該絵図は陣屋を考えるうえで重要な資料の一つといえるでしょう。

* 「札座」の建築年代については、最初の藩札が発行された年の前年の1821年（文政4）とする説（榎本2017）、明治初年に浅野長 発が江戸から戻り御殿屋敷を建てた明治初年とする説（榎本2016）があります。

〈参考文献〉

市村高規 2016 「若狭野浅野家」『忠臣蔵から村文書まで-西播磨のアーカイブ-』（たつの市立龍野歴史文化資料館）

市村高規ほか 2009 『忠臣蔵と旗本浅野家』（たつの市立龍野歴史文化資料館）

三浦俊明 1986 「近世相生の成立」『相生市史』第2巻（相生市・相生市教育委員会）

松本恵司 2016 『相生若狭野 旗本浅野陣屋 札座保存プロジェクト』（浅野陣屋札座保存ネットワーク）

松本恵司 2017 『相生若狭野 旗本浅野陣屋 札座保存プロジェクト 追加資料 2017』（浅野陣屋札座保存ネットワーク）

（中濱久喜）